

大日比西圓寺に関する研究史について

——大日比西圓寺及び同寺法藏調査研究序説——

西村 光 正

一、はじめに

現在、大日比西圓寺についての調査研究を行っている。研究対象である大日比西圓寺には「法藏」がある。この「法藏」には歴代上人により、収集、保管、利用されてきた書籍が収められ、今日に至るまで受け継がれている。「法藏」の収蔵物について明らかにする時、それは大日比西圓寺の全貌を知る上での大きな一歩となる。

これまでに行われた法藏調査について三件が確認できている。ここに挙げる先行調査とは、目録の作成を目的とした調査である。一件目は、昭和四年（一九二九）に行われた安藤紀一による調査である。この調査により、一部の外典類のみを収録した『法藏和漢書目録 西圓寺^①』が作成された。また、『法藏和漢書目録 西圓寺^②』は大日比西圓寺法藏内に現存している唯一の目録である。次に二件目は、昭和五十三年（一九七八）九月（昭和五十一年（一九七六）十一月）より大正大学浄土学研究室のメンバーを中心に編成された研究グループによって実施された調査である。この調査により目録が作成され、後に目録が完成し大日比西圓寺に収められたとされている^③。しかし、

現状では大日比西圓寺において、大正大学により作成された目録の所在は確認されていない。最後の三件目は、昭和五十九年（一九八四）三月七日より実施された国文学研究資料館による調査である。この調査は外典を対象とし、調査データは国文学研究資料館内にて保存されているが、現段階では目録としての公開はされていない。

本調査では、法蔵内に収められている書籍について明らかにすべく、悉皆調査により法蔵目録を作成している。これについては、尾崎千佳氏⁽¹⁾と共同で調査を行っている。当初より調査の目的は目録を作成する事であったが、平成二十二年（二〇一〇）を機に法蔵内の書籍に対し一冊毎にナンバリングを行い、その番号に対応した法蔵目録を現在作成中である。本調査研究の目的は、大日比西圓寺法蔵典籍より窺える前近代の大日比西圓寺について明らかにすることである。これを行うにあたり、先ず、先行研究の整理が必要であると考えた。

そこで本稿では、大日比西圓寺に関係する三十件の先行研究⁽²⁾について、その成立順に各研究内容について紹介し、各論文で何が明らかとされたのかを示すと共に、先行研究における問題点を明らかにした。また、これに伴って目録作成作業を通じた今後の研究の方向性についても提示したい。

二、昭和における先行研究

①中野隆元「浄土宗布教に関する法洲の諸説」

これが大日比関係の論文で最初のものと思われる。この研究の主体は法洲により記された『三法語』に附いている『講説大意』にスポットを当てたものとなっている。この論文により、法洲が幕末における熱心な宗学研究者であったという事実と法洲著『講説大意』は、法洲の布教に対する思いの肝であること。そして『講説大意』に説か

れる祈禱念仏、現世利益のための念仏の排斥や「勸誠の作略」など法洲の布教に関する意見が明らかになった。

②綿野孝瑞^⑥「大日比に就いて」

大日比西圓寺の縁起と論文執筆当時の境内、建物や習慣などについて大日比西圓寺の現状が書かれている。この論文により、昭和初期における大日比西圓寺の現状と明治維新の際に大日比西圓寺法藏典籍三万冊のうち一万冊を萩明倫館に寄贈したこと。この論文執筆当時の大日比西圓寺法藏内藏書総冊数は二万冊という点、また大日比三師の教化及び、現在の大日比は大日比三師により完成させられたものであるということ等が明らかになった。

③千賀眞順「大日比所藏の円戒曉示鈔に就いて」

日本における円頓戒は伝教大師が入唐して以来、受け継がれ法然まで伝承された。この論文では、法然門下でひろまった戒書の一つとして挙げられる『円戒曉示鈔』について論じられている。この論文より、大日比西圓寺に法洲による写本の『円戒曉示鈔』という戒書があるということが明らかとなった。

④野田秀雄「西国浄土宗寺院の史料調査とその研究——法岸書状について——」

大日比西圓寺所藏の法岸書状を紹介し、その往生観について野田氏の私見を述べるという形式で論が展開されている。この論文により、野田氏の論文執筆当時には、大日比西圓寺に法岸より、純教老和尚と津譽老和尚へ宛てた二通の書状が存在しているということ。その書状は全文朱筆で書かれており、内容は決定往生について説かれたものであるということ等が明らかになった。

⑤本田行憲^⑦「法洲の布教姿勢について」

大日比三師の中で特に法洲の布教・著作が多く、大日比三師の中核となっているとし、法洲の布教の姿勢について『講説大意』を中心に論を展開している。論文内容は前掲の①中野隆元と軌を一にする為、省略する。

⑥綿野得定「仏教と児童福祉」⁽⁸⁾

児童教育、児童福祉とは何たるかということを大日比三師の教化に関連させて論じている。この論文により、大日比西圓寺における法岸により始められた日曜学校（小兒念仏会）、胎教等に関し、大日比三師それぞれの『御垂誠』にみる児童福祉の思想と念仏教化等について明らかになった。

⑦丸山博正「大日比三師と徳本行者の教化について」⁽⁹⁾

大日比三師の教化活動について考察した後に徳本と比較しながら論が展開されている。この論文により、昭和五年（一九八〇）頃においての大日比西圓寺の念仏信仰概要、大日比三師の教化、徳本と大日比三師のそれぞれの教化姿勢は違うものの、教化の力の源は専修念仏による三昧発得であるということ。法洲の真宗との論争について、檀林修学により鎮西流の浄土宗僧侶として著作による論争ができたということ。そして法蔵内典籍数は数万冊で木箱は一五〇箱あるということ等が明らかになった。

⑧本田行憲「捨世派における清規の一考察」

門弟達への誠めである「清規」について、大日比三師によるものにスポットを当てて論じている。この論文により、捨世派における清規の基本は称念にあること。関通の清規の内容の流れを法岸が汲んでいること。法岸は尼僧へ禁煙を申しつけていたこと。法道による「報恩寺小清規」について等、大日比に関わる清規の内容について明らかになった。

⑨阿川文正「大日比西円寺と大日比三師について」⁽¹⁰⁾

大日比西圓寺に関しては最も有名といえる論文であり、大正大学の大日比法蔵調査チームによる調査内容をまとめ出版された『大日比 西円寺資料集成〈往生伝之部〉』に収録されている。この論文では、浄土宗捨世派につい

ての概要から始まり、西圓寺境内の諸建築物や本堂内の設えについて書かれている。この論文により、大日比西圓寺縁起と大日比三師の生涯と教化活動など大日比西圓寺に関する総合的な概要と大正大学が調査した際の大日比西圓寺法蔵の総蔵書数が約三万冊以上であるということが明らかになった。

⑩丸山博正「大日比三師の教化 ―勸誠両門について―」

捨世派である大日比三師の三代にわたり貫かれていた教化姿勢の根本について考察している。中でも勸誠両門について法然上人における勸と誠、特に誠についての問題意識を中心に論が展開されている。この論文により、大日比三師の布教姿勢の根本は三昧発得によるもので法岸の師の関通に源を発するものであるが、具体的な布教方法は漁村という地域社会に適した方法をとっており、関通の教化と一致するものでは無いということ。また、大日比の勸誠（勸誠の作略）について、先行研究では勸門七割、誠門三割の割合が重視されていたが、勸門↓誠門↓勸門の順が大切なのであつて定量的な問題では無いということが明らかになった。

⑪児玉 識「大日比三師の活躍」【IV信仰 五、近世社会と仏教】

主に綿野得定氏からの聞き取り内容を基として、大日比三師の『行業記』や先行研究に見られる『略伝記』の部分を参考にして、大日比三師それぞれの伝記の形式でまとめられている。この論文により、児玉氏は『法岸和尚行業記』中に見られる教化成果の原因を当麻曼陀羅と地獄絵図での勸誠だけでは無く、世界最初の日曜学校とされる小兒念仏会の影響もあるとしている。この他に、大日比三師の教化活動などの活躍について明らかになった。

⑫児玉 識「本慶山天龍院西円寺」（鎮西派 大日比）【IV信仰 四、各宗寺院の沿革】

大日比西圓寺の概要についてまとめられている。この論文により、大日比西圓寺の縁起と、「大日比流」^⑬とは大日比独自の特異な説経法であるということ、そして、大日比西圓寺法蔵内の総冊数が和漢宗内外典二万余冊である

ということ等が明らかとなった。

⑬児玉識「三 浄土宗」(鎮西派 大日比)【IV信仰 三、仏教諸宗派の動向】

現長門市の地域では江戸より明治にかけて浄土宗と真宗が寺院数、信者数ともに他宗を圧倒しており、両者の間で激しい宗教的対立があった事を挙げている。特に大日比、通地区での浄土宗の伝道活動は全国的に見ても目覚ましいものであったとし、大日比、通地区の仏教文化や大日比西圓寺の特徴について論じられている。この論文により、「大日比流」という、經典を一切読まず、終始声高らかに念仏する独自の読經法が江戸時代から伝えられていること。具体的には葬儀Ⅱ約二十分間、一般法事Ⅱ二十〜三十分間、寺院での法要Ⅱ朝・昼・夜の説教前に一時間、説教後に三十分間ほど高唱念仏すること。大日比西圓寺の住僧及び法船庵の尼僧では、現在も妻帯せず、一切肉類を断った精進生活をしていること。^⑭大日比、通などの浄土宗の優勢の地域では犯罪数が非常に少ないということ。その他、この地域での仏教文化等について明らかにした。

⑭大橋俊雄「大日比三師の往生論と往生伝」

この論文は大きく三つのブロックに分かれており、一では大日比西圓寺の縁起と大日比三師それぞれの略伝記を解説し、二では、大日比三師の布教内容や布教姿勢について論を展開し大日比三師の往生論について述べている。

三ではこの大日比三師の思想を踏まえて、大日比三師の作成した往生伝について論じている。この論文により、『法岸和尚行業記』(上・下)を編纂したのは法洲の法友の隆圓であること。大日比西圓寺は元々は律宗^⑮の寺院であったこと。大日比西圓寺蔵『往生伝』の概要と往生伝に掲載されている往生人の分析結果について。その他、大日比三師の教化や思想等^⑯について明らかにした。

⑮児玉 識「近世仏教の地域的展開 ―長州のばあい― 大津郡大日比、通両浦と浄土宗」

近世に於いて大日比、通を中心に地域住民の生活に密着した教化が実施され、それが一定の効果を上げた事例があるとして、大日比三師の教化活動を中心に論が展開されている。この論文により、大日比の地域における仏教化について¹⁷⁾。児玉氏は「大日比流」とは高唱念仏¹⁸⁾読経法のことであると認識しているということ。ロンドン大学チャールズ・ダン教授による世界最古の日曜学校についての説は綿野得定氏の談によるものであること。『法岸和尚行業記』の中にある法岸の教化成果について。黒谷法主より贈られた金襴衣を法道が辞退したこと。大日比や通地区において、浄土宗の教えが比較的純粋な形で定着したこと。浄土宗対真宗で生じた「大日比問答」とその背景の地域社会に宗教が深く浸透していたということ等について明らかになった。

⑬阿川文正「大日比西円寺蔵『往生伝』について」

大日比西圓寺に所蔵されている『妙祐信女往生伝』について論じられている。この論文により、昭和五十三年（一九七八）より丸山博正氏を含む六人の大正大学浄土学研究室のメンバーで大日比西圓寺法蔵調査を行ったこと。このとき約三万冊の蔵書を整理したこと。その整理の途中で大日比三師に教化された人々の往生伝を発見し前掲の⑨阿川文正の小論を附して『大日比 西円寺資料集成へ往生伝之部』として世に出したこと。その出版後に消息類三百余点の整理を行っていたこと。その際『妙祐信女往生伝』を発見したこと。『妙祐信女往生伝』にまつわる関通、法岸、勲譽、法洲らの活動に関すること。『妙祐信女往生伝』は大日比一連の往生伝の原型になったのではないかとし、大日比を中心とする一円の念仏布教に多大の影響を及ぼしたということ等について明らかになった。

三、平成における先行研究

⑰松月院「胎教のすすめ ―大日比三師上人の教え―」^⑲

「胎教教育」についてまとめられている。大日比三師の中で特に法岸の教化について考察されている。この論文により、法岸により始められた胎教についての概要についてと、その他の教化や仏教文化などについて明らかにな
った。

⑱岸村定浩「近世浄土宗の布教研究 ―西圓寺八世法岸について―」^⑳

冒頭に法岸が大日比西圓寺における児童教化の基を築いたとし、法岸の教化活動について論じられている。この論文により、法岸により基礎の築かれた児童教化が今日まで大日比西圓寺に於いて受け継がれ、教化実践について平成元年（一九八九）に正力松太郎賞を受賞したこと。その他法岸の教化活動について。法岸著『唯称蓮花三昧会』の概要などについて明らかになった。

⑲岸村定浩「近世浄土宗の布教研究 ―西圓寺一世法道―」

大日比三師のうち主に法道の教化と講説の準備などについて論じられている。この論文により、大日比西圓寺に於いて、法然の教えを受け継ぎ称名に励み、多くの念仏者を育て教導した大日比三師の流れを「大日比流」ということ。岸村氏は根拠を挙げていないが大日比三師には遁世的意識はないということ。「大日比三師」という敬称について『大日比三師傳』や『大日比三師講説集』より前の出版物等に見たことがないとした上で、大日比三師を慕う人々が「大日比西圓寺の三人の師」と呼び習わしたことからきているのではないかということ。その他大日比三

師に関わること等が明らかになった。

②⑤ 森田孝隆「『臨終行儀』の再現について」

法然の撰とされる臨終行儀の内容を『臨終講式』を参考に再現しまとめ考察されている。この論文により、森田氏がこの論文を執筆した当時、大日比西圓寺に『臨終講式』があつた事が明らかになった。

②⑥ 真山 剛「寺院紀行 山口・大日比西圓寺」

大日比西圓寺と大日比三師の概要についてまとめられている。この論文により、大日比三師の教えが金子みすゞに影響した可能性があること。法洲が五重相伝について総本山知恩院の依頼で『信法要決』としてまとめたこと。法道は達筆であり、中国の書家から絶賛されたこと。真山氏がこの論文を執筆した当時、大日比西圓寺法蔵には仏教書など数万冊が収められていたということ。その他大日比西圓寺に関わること等が明らかになった。

②⑦ 長谷川匡俊「近世の念仏聖・大日比三師の福祉思想」

大日比三師の実践と著作を基に福祉思想を探るとした上で①念仏勧化による民衆の生活に根ざした福祉意義の醸成と福祉の実践の思想②生活福祉の思想③仏教福祉の実践原理たる布施④施行など利他的善行と念仏との関係⑤身分制社会における浄土教的な平等の人間観という三つの視点から論が展開されている。この論文により、大日比三師の教化活動により地域民衆の実生活に即して念仏の浸透がなされ、生活が念仏によつて基礎づけられ、促され、改善されていったこと。生業と殺生の両立という課題に関して、関通が絶対的不殺生を徹底したのに対し、法岸は関通の教えを受け止めながらも、現実を踏まえ、生命への感謝と生類愛護の念の宣布に努めたこと。長谷川氏は小兒念仏会だけではなく、妊婦の念仏である胎教も含め「世界最初の日曜学校」としていること等の大日比三師の生活福祉論について、長谷川氏の独自の観点より大日比三師の中でも特に法洲の施行論と平等論について明らかに

った。

②③宮入良光「大日比法洲の『信法要決』について」

「結縁五重相伝勸誠録の比較研究」の一環として、稀書である法洲著『信法要決』の確認検討について整理報告している。この論文により、隆圓著『浄業信法訣』を基に法洲によりまとめられたものが法洲著『信法要決』であり、隆圓著『浄業信法訣』と法洲著『信法要決』を基に勸誠の要点を整理し、自らの講説を加えたものとしての門著『信法要決辨釋』があるということ。その他、法洲著『信法要決』に関わること等について明らかになった。

②④上野大輔⁽²⁸⁾「近世真宗優勢地帯における浄土宗の思想的機能——鯨回向を手がかりに——」

研究の目的として近世社会において構造化された仏教が担った社会的機能について、思想面を中心に長州大津宰判地域の浄土宗と真宗を対象として論が展開されている。この論文により、前大津宰判地域では真宗が優勢であり、次いで浄土宗が優勢であること。真宗は全域的に優勢であり、浄土宗は沿岸部を基盤としていること。鯨組網頭の家はほとんどが浄土宗の有力檀家であり、鯨の位牌や墓の成立にはこの鯨組網頭達が中心的に関与していたこと。その他、回向などについて詳しく検討がなされ、回向の機能などについて明らかになった。

②⑤福田安典「夢を見ることを忘れた頃に——安西法師の奇蹟——」

安西法師及び同師の『往生記』の成立、刊行について書かれている。先ず、安西法師の物語についての紹介がなされ、続いて『往生記』の伝搬と大日比西圓寺、萩報恩寺による再刻を含めた出版の動向についてまとめられている。この論文により、安西法師の『往生記』は獅子谷法然院に伝わり、忍叡の弟子の龍河により正徳版として成文化されたこと。龍河による正徳版の文体は漢文に疎い者でも分かりやすいものであったこと。後に正徳版の版木が焼失したため、法岸が再刻を決意し、弟子の法洲と定仙によって文化版として再刻されたこと。文化版の出版につ

いては、法洲の友人の隆圓による協力があったこと。大日比西圓寺藏『往生記』は表紙が緑色であること。法岸の敬慕していた安西法師が以前は漁師であつたこともあり、漁師の多い大日比での教化に関係して出版したということ等について明らかになった。

②⑥上野大輔「長州大日比宗論の展開——近世後期における宗教的対立の様相」

近世社会における諸宗教の教義などの多元性に基づく知識人レベルでの思想対立と地域民衆との関係にポイントをおきながら、天明三年（一七三八）と文化・文政年間に長州藩地域の浄土宗（鎮西派）と真宗（西本願寺派）の間で僧俗を巻き込んで展開した宗論について、社会状況や地域民衆との関係について考慮しながら論じられている。この論文により、大日比宗論の展開等について明らかになった。

②⑦打出祥子「金子みすゞの童謡詩における色彩表現と仏教について」

金子みすゞの色彩に関する研究があまり進んでいないとした上で、「色彩表現と宗教」というポイントに絞って論じている。この論文により、金子みすゞの作品中に使用される色の用法に関すること^{③①}。金子みすゞが、大日比西圓寺の日曜学校に参加していたとも考えられること。浄土信仰に基づく教えや往生伝を聞く機会があつた可能性があること等が明らかになった。

②⑧長谷川匡俊「大日比三師 法洲」

前掲の②⑧長谷川匡俊の中で取り扱っている、①生活福祉論を除いた、②仏教福祉の実践原理たる布施Ⅱ施行など利他的善行と念仏との関係についてと、③身分制社会における浄土教のな平等の人間観についての内容を一般読者も対象とした分かりやすい文体に変えて論じられている為、省略する。

②⑨西村文成^{③②}「鯨に感謝する日本人——大日比西圓寺の場合——」

捕鯨を含む漁業を生活の基盤とする青海島においての大日比三師の教化と鯨回向について論じている。この論文により、大日比西圓寺の本堂は専ら念仏と説教を中心に利用されていること。『大日比西圓寺勤行式』に記載されている回向文には回向の対象として、魚群、イルカ、クジラ、虫の四つが挙げられていること。中でも虫については、田畑を耕した際に衝撃で死んでしまう虫などを指していること。漁師の生活に密着した魚類回向は生命の尊さを説いたものであり、地域社会に根ざした念仏教化が行われてきた証であるということ等が明らかになった。

③⑩上野大輔「近世前・中期大日比浦の共同体秩序——漁業編成と宗教的紐帯——」

近世前期から中期の大日比浦の共同体秩序を動態的かつ構造的に明らかにするとした上で、第一章では上利氏を中心とした荒廃状況からの復興、漁業組織の拡充、古網と新網の対立について。第二章では上利氏による大日比西圓寺の建立と、他地域からの移住者による真宗寺院建立運動の展開について。第三章では経済的危機下における内情勢とそれに伴う上利氏による秩序維持の課題化などについて論じられている。この論文により、大日比浦における大日比西圓寺と大日比三師の教化が上利氏中心の大日比浦の秩序形成に影響を及ぼしたことなどについて明らかにされた。

四、先行研究における問題

■先行研究全般に言えること

さて、三十件の先行研究について刊行年順に整理してきた。これらの先行研究について総じて言えることは、「大日比西圓寺」についてではなく、「大日比三師」が主体として関わった内容について取り扱われているという

ことである。先行研究中に確認できる「大日比三師」以外の西圓寺の僧侶として、讚譽、常称、靈幢、杜多圓暢、河島諦定。西圓寺に縁のある僧侶として、勲譽、弁信、的門、隆圓などの名前が確認できる。しかし、名前の紹介程度はあるものの、実際の彼らの活躍については、的門、隆圓を除くと、未だその詳細は明らかとなっていない。さらに現状では、西圓寺について『行業記』以外に知ることが出来る第一次資料は少ないと言える。先行研究の多くは、大日比三師の教化活動に関するものであり、これらの研究の際に使用される主な資料としては、『行業記』や『大日比三師講説集』に限られていることに注意しておきたい。これらのことから分かるように、西圓寺自体の研究や、「三師」以外の僧侶を主体とする研究は未だ行われていない。これは、それらを知る上での糸口となる資料が少なく、研究者が手を出しにくいという現状が反映されているものと考えられる。

次に、全ての先行研究で、大日比三師については「捨世派」として論じられている。この内、⑭岸村定浩のみ、「捨世派」という分類に限界が生じているとし、大日比三師は遁世的では無いとしているが、具体的な理由は挙げていない。また、大日比三師を含む大日比西圓寺と、仏教関係以外の「外部」との関わりや、大日比西圓寺法蔵における「外典」についての研究は一件も見られないことにも注意をしておきたい。

■先行研究における西圓寺蔵書の扱いについて

本稿で検討した先行研究では西圓寺蔵書の全容を踏まえた研究はなかった。それは目録が刊行されていないことによるものであると考えられる。しかし、先行研究では「大日比西圓寺所蔵の○○」といった形で箇々の蔵書が紹介されているものがいくつかあるので紹介する。③千賀貞順、法洲写本『円戒曉示鈔』。④野田秀雄、『法岸書状』、『掟書』。⑨阿川文正、『(仮称)西圓寺縁起』。⑭大橋俊雄、『往生伝(授光童女の)』。⑯阿川文正、『妙祐信女往生

伝』。⑭岸村定浩、法岸著『唯称蓮花三昧会』。⑮岸村定浩、『垂誠』。⑯森田孝隆、『臨終講式』。⑰真山剛、『弟子名簿』。⑱福田安典、『予州安西法師往生記』。⑲上野大輔は「……が蔵書により示される」としての用法で利用。以上三十件中十一件の研究の中にこれらの記載が見られる。しかし、これらについては、「大日比西圓寺所蔵」とあるだけで、何かの目録によるというわけでは無い。つまり、所在を示す典拠を挙げているものは一件も無いということに注意しておきたい。また、大正大学系の論文においても、大正大学により作成されたという法蔵目録を利用した研究は一件も見当たらない。これだけの先行研究がありながら、大日比西圓寺法蔵の蔵書を何らかの典拠を挙げて所在を示し具体的に使用した例は一件もないのである。

■大日比西圓寺法蔵の蔵書数について

次に、大日比西圓寺法蔵の蔵書数について述べているものがあるので紹介する。②綿野孝瑞によると、元は三万冊あったが、内一万冊を萩明倫館に寄贈し現在は二万冊。⑦丸山博正によると百五十箱の木箱の中に数万冊。⑨阿川文正によると約三万冊、約三万冊以上。⑫児玉識によると二万余冊。⑬阿川文正によると約三万冊。という五件の先行研究に大日比西圓寺法蔵の蔵書数が述べられている。しかし、これについても何によってそう言えるのか。調査して判明したならば、調査記録は何処にあるのかなど、いずれも根拠を挙げているものは無い。

五、おわりに

本調査研究において現段階で確認したことを報告しておく。対一冊にナンバリングを実施した結果、大日比西圓

寺法藏總藏書數は一四〇五九冊である⁽³³⁾ということが明らかとなった。この藏書の中には三師以外の僧侶による収集の書籍の存在も確認できた。よって、三師以外の西圓寺に関係する僧侶の活躍についても注目すべきであると考えている。そこで本調査研究では、「大日比三師」として限定せず、「大日比諸師」というより広い範囲で捉えることにした。また、法藏には外典も多く収蔵されていることが明らかになった。これを受けて、西圓寺における外典の収集や、外典より窺い知ることの出来る仏教関係以外での西圓寺の僧侶と外部との関わりについても着目し研究を進めている。以上のことより、現状では目録作成中の為、確定的なことは言えないが、「西圓寺」|| 「大日比三師」|| 「捨世派」という先行研究の括りを見直すべきであると考えている。今後は、作成中の目録の完成を目指すとともに、本調査研究の詳細な成果について、順次公表していく予定である。

七六

[illegible]

⑪	平成二四年	二〇二二年	上野大輔	〔掲載予定〕「近世後期」捨世派」僧侶の布教と地域民衆 ―大日比西円寺の法岸・法洲・法道に着目して―	「仏教史研究」	四九号	龍谷大学仏教史研究会	二六―四八頁	刊行予定論文のため本稿では対象外
⑩	平成二四年 一〇月	二〇二二年 一〇月	上野大輔	「近世前・中期大日比浦の共同体秩序 ―漁業編成と宗教的紐帯―」	山口県地方史研究」	一〇八号	山口県地方史学会	一一―一六頁	
⑨	平成二四年 八月二日	二〇二二年 八月一日	西村文成	「鯨に感謝する日本人 ―大日比西圓寺の場合―」	月刊「食生活」	第一〇六巻 第八号	株式会社カザン	三九―四二頁	
⑧	平成二三年 四月二五日	二〇二一年 四月二五日	長谷川匡俊	「大日比三師 法洲」	「念仏者の福祉思想と実践 ―近世から現代にいたる浄土宗僧の系譜―」		法蔵館	六三―七七頁	
⑦	平成二三年 二月	二〇二〇年 二月	打出祥子	「金子みすゞの童謡詩における色彩表現と仏教について」	大正大学大学院研究論集」	三四	大正大学大学院	三三―三四頁	(ネット上 pdf)
⑥	平成二二年 六月二〇日	二〇〇九年 六月二〇日	上野大輔	「長州大日比宗論の展開 ―近世後期における宗教的対立の様相」	日本史研究」	五六二	日本史研究会	一一―一八頁	
⑤	平成二〇年 〇月二〇日	二〇〇八年 〇月二〇日	福田安典	「夢を見ることを忘れた頃に ―安西法師の奇蹟―」	詞林」	第四四号	大阪大学古代中世文学研究会	七九―九〇頁	
④	平成二〇年 九月二〇日	二〇〇八年 九月二〇日	上野大輔	「近世真宗優勢地帯における浄土宗の思想的機能 ―鯨回向を手がかりに―」	史林」	九一巻五号	史学研究会(京都大学)	三三―六四頁	
③	平成二〇年 九月	二〇〇八年 九月	宮入良光	「大日比法洲の『信法要決』について」	教化研究」	No二九	浄土宗総合研究所	四三八―四四九頁	
②	平成一四年 一二月	二〇〇二年 一二月	長谷川匡俊	「近世の念仏聖・大日比三師の福祉思想」	日本仏教の形成と展開」		法蔵館	五七五―五九〇頁	
①	平成一〇年 一二月二日	一九九八年 一二月二日	真山剛	「寺院紀行 山口・大日比「西圓寺」」	「浄土」	一九九八／ 一二月号	法然上人讃仰会	二二―三〇頁	
②	平成一〇年 三月二二日	一九九二年 三月二二日	森田孝隆	「臨終行儀」の再現について」	「教化研究」	No三	浄土宗総合研究所	五一―五七頁	
③	平成一〇年 三月二二日	一九九二年 三月二二日	岸村定浩	「近世浄土宗の布教研究 ―西圓寺一世法道―」	「教化研究」	No三	浄土宗総合研究所	三五―四五頁	
④	平成一〇年 三月二二日	一九九二年 三月二二日	岸村定浩	「近世浄土宗の布教研究 ―西圓寺一世法道―」	「教化研究」	No二	浄土宗総合研究所	八四―九二頁	
⑤	平成一〇年 八月三〇日	一九八九年 八月三〇日	松月院	「胎教のすすめ ―大日比三師上人の教え―」	胎教のすすめ」		浄土宗 松月院	一一―三七頁	
⑥	昭和六二年 一〇月二〇日	一九八七年 一〇月二〇日	阿川文正	「大日比西円寺蔵『往生伝』について」	「松教授「古希記念 浄土教論集」		大東出版社	六八九―七一〇頁	

註

- (1) 【形状寸法等 縦二四・三×横一六・六×厚一・〇 全六三丁】
- (2) 阿川氏は昭和五十三年九月より調査を開始した(『大日比西円寺資料集成〈往生伝之部〉』(あとがき)参照)としているが、丸山氏は昭和五十一年十一月より調査を開始した(⑦丸山博正 参照)としている。
- (3) 平成十七年(二〇〇五)十一月二十一日 三大本山布教師会研修(於・大日比西圓寺) 阿川文正「大日比三師関係資料を繞つて」(レジュメ)による。
- (4) 尾崎千佳(現在山口大学文学部准教授) 専門は中世―近世の連歌・俳諧史。尾崎氏は平成十九年(二〇〇七)より現在にかけて、大日比西圓寺法蔵調査を行っている。
- (5) この三十件の先行研究については平成二十四年(二〇一二)十月の時点で調査しまとめたものである。主に大日比西圓寺及び大日比三師について主題として取り扱われている研究を対象として整理した。尚、執筆者名上部の番号は末尾に附した「大日比関係先行研究一覧表」に対応しているため、各論文の解説の度の註は省略とする。又、掲載スペースの関係により、各研究についての解説は、その概要のみをまとめたものとなっている。
- (6) 執筆者の綿野孝瑞氏は大日比西圓寺先住の綿野得定氏の実の弟である。後に名前が木下孝瑞となる。
- (7) 執筆者の本田氏は大正大学の阿川氏による大日比法蔵調査チームの一員であり、この論文は大正大学大学院浄土学研究室在籍中に書かれたものである。
- (8) 執筆者の綿野氏は大日比西圓寺先住である。
- (9) 執筆者の丸山氏は前掲の本田氏と同じく、大正大学の阿川文正による大日比法蔵調査チームの一員である。
- (10) 本調査(尾崎・西村)においては百四十二箱。

(11) 執筆者の阿川氏は大正大学の大日比法藏調査チームのリーダーで前掲の丸山氏、本田氏等とともに大日比西圓寺法藏調査を行った。

(12) 『法岸和尚行業記』中に見られる「村中の老若男女一人も残らず日課念仏を誓い、田をうつにも、薪こるにも、菜つみ、水くみ、網ひき、釣りをするにも念仏せざるものなく」という教化成果。

(13) 児玉氏は、特異な説経法の事のみを指して「大日比流」としているが、¹⁹岸村定浩や深貝慈孝『中国浄土教と浄土宗の研究』（平成十四年（二〇〇二）十月 思文閣）六五〇頁〈初出論文は『日本仏教学会年報』四十五 昭和五十五年（一九八〇）〉は、「大日比流」とは浄土宗捨世派における一流派として定義している。

(14) 先住の綿野得定氏の代より肉食妻帯はなされている。法船庵（現庵主は稗田照心法尼）の尼僧については、現在も肉食及び、所帯を持つことはなされていない。

(15) 浄土宗寺院となる以前の西圓寺について、文献によって「律宗」や「真言宗の律院」など、複数の異なる記述があることを、上野大輔氏は指摘している。

(16) 関通と法洲のそれぞれの自称の方法が同じ点や、法洲の『講説大意』と関通の『燈囊偈語』それぞれに説かれる現世利益の念仏についての批判など、関通から大日比三師へ流れているものとあると言うこと。法道の勧誡による誠めとして遊芸の類とされるものについて、これを生業としている者以外は学ぶべきではなく、倫理礼節にかなうよう生活すべきであると言っていること。法洲の説く専修念仏者の人間的條件は忠・孝・貞であること。法道は生活に密着した勧誡を行い、特に殺生に関わる事柄については具体的に説いていること。法道の教化には、法道が戒律について厳修したことが影響していること。法道は円通律師に戒学については一番であると認められたこと。大日比三師は浄土宗の円頓戒はもちろんのこと浄土律について修していた為、法洲著『普通授戒講説』に見られる、戒法による悪の

抑止と念仏による既存の悪人の救済を示し、この両方があいまって救済が成就するということ。

- (17) 児玉氏が論文執筆当時の大日比、通地区に伝承されている仏教文化について、鯨回向、鯨墓、鯨過去帳等に加え人間の墓に対する意識が高く一日朝夕二回参拝すること。お盆には親族同士仏壇を拝みに家々を回りその際、もてなしとして団子と酢の物が出されるということ。漁業中に水死体が網にかかった場合、漁師が自分の親族と同等に扱い葬儀、埋葬、年忌法要を行うこと。大日比西圓寺で行われる一般法要の際、最初の二十分間は「長念仏」といわれ網引念仏にルーツがあること。これらの地域に密着した教化は大日比三師の活躍によるものであること。

- (18) 『法岸和尚行業記』の中にある「村中の老若男女一人も残らず日課念仏を誓い、田をうつにも、薪こるにも、菜つみ、水くみ、網ひき、釣りをするにも念仏せざるものなく」という一文についての児玉氏の見解は当麻曼陀羅と地獄絵図を本堂内に掲げて法岸の行った勸誠による成果だけではなく、年末年始の勸誠や小兒念仏会の成果も影響しているという点。

- (19) 執筆者の記載はなく「松月院」とだけ記載があるため、以後の註では、執筆者名は松月院某氏とした。

- (20) 法話を原稿に起こしたものであるが引用や註などがある為、論文として取り扱うことにした。

- (21) 世界で最初の日曜学校については綿野得定氏からではなく西村立信氏からの談であること。松月院に残る安産祈願の伝統でお十念を授ける習慣が大日比三師の影響によるということ。松月院某氏は法岸の胎教の教えについて一軒の家の枠組みをなすべき考え方であると捉えていること。また、親子の深い絆、良き人間形成、良き家庭といったことの土台をなすべき考え方であるとも捉えているということ。

- (22) 執筆者の岸村氏は前住職の綿野得定氏の弟子で大日比西圓寺に住んでいたこともあるが、後に離弟となっている。

- (23) 法岸における教化についての根幹は法岸著『化他発願文』にあること。前掲の中野氏、本田氏は法洲著『講説大

意」の中に説かれる「勸誠の作略」について論じているが、今回の岸村氏は前掲の丸山氏と同様に法岸の著述に見られる「勸誠二門の作略」について論じていること。「勸誠二門の作略」が実際に活用された唯一の例は安永八年（一七七九）三月二日に法岸により行われた当麻曼陀羅と地獄絵図を本堂内に掲げて行われた勸誠であること。また、「勸誠の作略」の根拠は善導、法然、良忠の著述にも見られること。法岸著『唯称蓮花三昧会』という資料が大日比西圓寺に存在していること。法岸による三昧会の参加者は青海島以外の人々も含め七百人いたこと。

- (24) 法道の著書、著述として伝わるものは一冊も無いということ。法洲の書き残したものを法道が編集したものとして『二祖国師褒賞弁』一卷と『御傳撮要講説』八巻があること。法洲の膨大な著作はすべて講説のためにあるということ。法道は説法講説の為に『選択集』、『大原問答』、『浄土十勝箋節論』、『帰命本願鈔』を研究していたということ。『垂誠』とは法岸が法洲へ、法洲が法道へ、法道が弟子や信者たちへ贈った教訓であること。この論文の執筆当時に於いて大日比西圓寺の孟蘭盆法会では昼夜三日間、『垂誠』が本堂に掲げられ懇切に三師の深い心が説かれていること。

- (25) 執筆者の森田氏は、現在は浄土宗法儀司であるが、以前、大日比にて修行した経験を持つ。

- (26) 法然上人讃仰会の大日比西圓寺への取材の際に『剃度並隨身弟子中連名誌』を見て四百四十二名の名が記載されているとされていること。大日比西圓寺も含む長門市仙崎の多くの寺院では宗派を問わず共通した鯨を供養する「鯨法会」が行われていると。

- (27) 法洲著『信法要決』は結縁五重相伝会（化他五重相伝会、在家五重）についての書物で、法洲が知恩院説行大僧正の命により執筆し献上したものであること。法洲著『信法要決』は勸誠篇・伝書篇の二部構成であること。的門著『信法要決辨釋』は法洲著『信法要決』の勸誠篇にのみ自身の講説を追加したこと。『信法要決』の内容は要点のみ

の記述であり凡学の僧には容易に扱えないものであり、釈尊伝や法然上人伝などが省略されており、限定された信仰の厚い知識を備えた受者を対象としていたこと。要偈・密室道場は本来夜分に行うが、今時は昼夜二席に配することが多く、夜間二日間にあたる場合もあるということ。法洲が当時の結縁五重の現状について僧侶と受者の間にも結縁五重と授戒の混同があるという問題を指摘していること。法洲は五重相伝の本体は口称の一行にあり、誤りなく相承する相伝の儀式であるという認識をもっていたこと。法洲は十念伝ばかりに重きを置く誤りを指摘しているとし、安心を素直に立てた口称の日課念仏こそが正体であり、それは前四重にあると明言していること。法洲著『信法要決』は結縁五重勸誡及び伝書の確固たる指針となるものであること。

(28) 執筆者の上野氏は山口県の出身であり、大日比宗論に関わる研究が多くある。

(29) 浄土宗は回向以外の現世利益的領域をカバーすることにより捕鯨とつながりを持っていたこと。大日比西圓寺開山讃譽は通浦鯨組網頭の池永家出身であると。鯨位牌と鯨墓には、念仏の功德によって鯨を極楽往生させ、それによって鯨を殺し食することを正当化する思想が表明されていること。通地区の浄土宗が管轄した思想的機能として、殺生を前提とする捕鯨への罪惡意識を克服させ、捕鯨業の正当化に貢献したものであったため、捕鯨業を主要産業とする社会にとって不可欠なものとなったこと。浄土宗の魚供養と真宗の魚法会での供養の違いは回向觀の違いに原因があること。法道の『御垂誡』は殺生した生類を救済するための回向を認めない真宗の教義に対するアンチテーゼとなったこと。浄土宗の回向について、殺生を詫びるという事において、「残忍なる殺生」を行った場合でも有効な対処法となったこと。上野氏は児玉識氏の指摘する鯨回向や魚鱗回向に免罪機能があり、「回向」祈禱」と定義していることについて定義の説明がなされていない点を指摘していること。殺生を主要な生業の一つとする地域において、真宗は代替不可能な回向を行使する浄土宗が独自の社会的意義を獲得したこと。真宗は他力主義のもと、捕鯨や漁業など

の生業における殺生を是認が、浄土宗の回向のような殺生の対象への直接的な罪惡を精算する機能を果たさなかったこと。殺生への対処において浄土宗は真宗よりも有力地位を確保したと。

(30)

大日比宗論に関わる先行研究として杉紫朗、『豊田町史』、児玉識、結城令聞、深川宣暢らのものがあること。上野氏は法洲と法道の間で住持を務めた「靈幢」について「靈幢」としていること。大日比三師を「捨世派」の僧侶であるとした上で、「捨世派」とは浄土宗の中でも専修念仏、持戒、民間布教を特に重視するグループであると上野氏は認識していること。中野家は名字・帯刀の免許者を出す家柄で、真宗の徳応寺の檀家であり、豊富な家産を基礎に農業を中心とした各種の経営を大規模に展開していたこと。中野玄蔵は真宗信者であると共に儒学にも精通しており、政治的・経済的な有力者であり、文化面でも認知されており、藩内外の文化人とも広く交流関係があったこと。中野玄蔵は宗論時には老年だった為、著作においても来世での極楽往生は切実な問題として語られていること。化政期宗論に関して著作の応酬が地域民衆を巻き込んだ浄土宗と真宗との広範な対立と結びつく形で展開したこと。法洲の遠島については、真宗側の激しい反発に加え、萩の浄土宗僧侶が法洲の五重相伝について訴えたことが直接的な処罰の原因であったこと。上野氏は尊超法親王のことを、「知恩院門跡」ではなく「知恩院門主」としていること。法洲は「正」とは浄土宗を意味し、「邪」とは真宗を指すワードとして使用していたこと。大日比宗論の拡大と激化について次の三点を挙げている。①仏教が地域社会に構造的に組み込まれていた点②浄土宗と真宗が大部分を占める地域の為、二極化された点③書物を活用した弁論の広範な成立という点であること。書物の読解・執筆・贈答や刊本・写本の流通などは大日比宗論において重要な要因となり大日比西圓寺蔵書によっても示されること。大日比宗論は藩の統制の影響を受けながらも書物の流通と知識人の交流が拡大され、仏教の教説の伝達と共有も促進されたこと。幕藩権力の仏教諸宗に対する中立的性格は注意すべきことであり、宗教的共存とは、思想対立を理論的に解決するこ

とは無く棚上げした、政治的共存を意味したこと。

(31) 金子みすゞの作品中に使用される色として赤・青・白・黒・金があること。黒はマイナスイメージ、自分自身を表し、金は夢やお伽の世界、仏教の世界、死後の世界を表す色であること。全五百十二作中で「向日葵」という作品のみ、黄・青・白・黒・赤の五色が、唯一揃っていること。五色は浄土信仰の臨終時において特に重要な色であること。阿川文正『大日比 西円寺資料集成〈往生伝之部〉』に臨終の際、聖衆来迎の際に瑞相として五色の雲が見られることが述べられていること。「向日葵＝ひまわり＝日輪草」、「日輪＝阿弥陀仏」であること。

(32) 執筆者の西村氏は現在の西円寺及び願王寺の住職である。

(33) 現時点で法蔵内に収められている木箱に収められている全ての書籍を対象としナンバリングにより判明した冊数であり、近世以降の書籍も多少含まれている。また、若干ではあるが現時点ではナンバリングを実施していないが、今後収録の対象となり得る可能性のある書籍も存在しているので、一四〇五九冊というのは、あくまでも暫定値としての総蔵書冊数であるということに注意しておく。

〔付記〕 本稿は、大日比西円寺調査を通して大変お世話になっている尾崎千佳先生との法蔵目録作成作業が土台となっている。記して謝意を申し上げたい。また、本稿脱稿後、平成二十五年一月四日に上野大輔先生より『近世後期「捨世派」僧侶の布教と地域民衆 ―大日比西円寺の法岸・法洲・法道に着目して―』（『佛教史研究』四十九号、平成二十四年七月刊）という論文を頂いた。本来、本稿で取り上げるべき最新の研究であったが、取り上げることができなかった事をお断りする。